



午前十一時に開会式があり、後藤副会長の開会の辞に続き国歌斉唱を行った。
会長挨拶では渡邊会長が、「ウェルビーイングという考

特集 第63回教育研究大会 大阪・阪南大学にて開催

本年は、八月二十二日(土)、兵庫県教師会の主管で、阪南大学本キャンパスを会場に開催された。

研究主題は「これからの時代に求められる学校教育をどのように進めていくか」で、社会が大きく変化する中、これまで本会が求めてきた伝統的価値に基づく教育を現代にふさわしい形で発展をさせようとするものであった。

日本の教育

発行所 日本教師会
事務所 〒503-0023
大垣市笠木町 229-5
郵便振替口座
00860-1-154425

日本教師会綱領
一、本会は教師の使命を自覚し、日本にふさわしい教育を推進する。
二、本会は研修を通して教師の指導力と実践力を高める。
三、本会は厳正中立の立場をとる。
四、本会は教育活動を通して、国民の信頼と期待に応える。

えかたが求められる時代になったが、欧米が『個人達成指向』であるのに対して日本は『関係指向』『協調指向』の中に幸福感をもっている。世界で紛争の絶えない現在、日本的な考え方に世界は期待を寄せている。」として、本大会のキーワードである「日本型学校教育」の姿を明らかにしていきたいと述べられた。

歓迎の挨拶は兵庫県教師会会長で阪南大学学長でもある平山弘先生より、阪南大学の紹介と大会の成果を期待する言葉があった。

来賓は全国教育関係神職協議会会長寶来扶佐子先生が紹介された。

研究主題の解題は会長が行い、現在の教育を取り巻く環境の変化に対して「令和の日本型教育」が提唱され、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な実現が求められているが、学習方法などの技術的・制度的な改革に関心が向いている。しかし、教育の本質は人間教育にあるとし、大会の方向性を示された。

基調講演は阪南大学学長の平山弘

教授で、「ウェルビーイング時代における学校教育の方向性」と題して、ウェルビーイングの意味と阪南大学で実践されている教職科目の学校制度論への位置づけを述べられた。

授業では教職を目指す学生に対して、我が国の学校制度を理解させるため教育関連法規と学校経営の実際について解説し、魅力ある学校や児童生徒にとってウェルビーイングである学校づくりを考えさせていた。

午後の特別講演は、阪南大学大学院企業情報研究科長の松田健教授より、「生成AIは教育にどのような影響をもたらすか」と題して行われた。

生成AIは令和四年(二〇二二)にChatGPTの登場以来、利活用が急速に拡大し、その有効性ととも問題点も指摘されている。教授は生成AIの仕組みから、人間を超えることはないし、恐れることはない」と強調された。また提示される情報には問題もあり、使用する我々が正否を判断する力をもつべきとされた。

実践発表は二本で、最初に阪南大

学の中塚正裕講師より「キャリア教育の現状と課題」と題して行われた。まず日本財団の「18歳意識調査」によると、日本の若者は「将来の夢」が描けない、「なりた職業がない」など、他国に比べて将来像を描けない状態であることを指摘された。

これは我が国の家庭や学校での指導の在り方に問題があり、キャリア教育が不十分である。そこで、教職課程を撰んだ学生に自身の中高生時代からの進路選択を振り返らせ、将来、教員として生徒にどう指導すればよいかを考えることのできる講座を実践し、その成果を報告された。

小学校からは広島市立小学校的の片川儀治教諭から「ジャパニーズスピリッツ教育の実践と展望」と題した実践を紹介された。

その中身は日本の伝統・文化・日本精神を現在求められている個別・協働的な深い学びといった教育と融合させ、子供達に自信と誇りを回復させ、今日の複雑で難しい課題に立ち向かう日本人の育成を目指された。

具体的には「偉人教育」「郷土教育」などで単に知識を与えるだけでなく、自分で調査をし、自分ならどうするかという自身の生き方まで考えさせたのである。

今後、この教育を他国との交流で発展させる構想も発表された。

— 基調講演 —

ウエルビーイング時代における

学校教育の方向性

阪南大学教授 平山 弘



ウエルビーイングとは、「社会的に充たされた状態・幸福感・つながり・協同性・利他性・

多様性・サポート環境・貢献意識・自己肯定感・自己実現・身体的健康・精神的健康・安全安心な環境」を意味している。これからは国民の一人一人がそう感じられる社会が求められる。

ここでは、私が本学で担当している教職科目の学校制度論におけるウエルビーイングについて述べる。

授業のテーマは「我が国の学校制度の理解と教育関連法規を知る」であるが、日本国憲法下での学校制度とその根幹をなす教育関連法規の理解を図るのがねらいである。

その中で教育の目的、その理念と実施の概要、教育行政の役割を理解し、学校経営のなかで児童生徒のウエルビーイングをどう実現していくかを考えさせる。

将来教員を目指す学生たちには、

この授業を通して、教師としての資質・能力を身に付けるだけでなく、一人の人間としても魅力ある教員を目指させたいと考えている。

授業の流れは次の通りである。

第1回「授業ガイダンス」日本国憲法、教育基本法、学校教育法、地方教育行政の組織及び運営に関する法律、いじめ防止対策推進法など

第2回「教育の目的及び教育の目標」

第3回「生涯学習の理念」

第4回「教育の機会均等」

第5回「教育の実施に対する基本義務教育 学校教育」

第6回「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」

第7回「教育行政のしくみ、教育振興基本計画」

第8回「教職員、教員の使命 教育職員免許法 地方公務員特例法」

第9回「学校経営（1）魅力ある学校経営と魅力ある学級づくり、PDCAの重要性、学校のブランド化と学級のブランド化検討」

第10回「学校経営（2）児童生徒のウエルビーイングを意識した学校づくり、日本とイタリアの事例から」

第11回「学校経営（3）学校組織としての児童生徒の安全面の保障と精神面からの安心感を与える学校

づくり」

第12回「学校経営（4）地域社会とともにある開かれた学校づくり」

第13回「学校経営（5）ワークライブラランスを意識した学校づくり」

第14回「学校経営（6）カリキュラム・マネジメントとPDCAの重要性」

第15回「学校制度論Iのまとめ」

以上、ウエルビーイングの本質である児童生徒の安全・安心及び教職員のワークライフバランス（働き方改革）を根底において指導する。

そこで①日本とイタリアにおける専門学校教育の違い②防災教育③いじめを防止することのできる学級作り④中学校における部活動が実質的に外部顧問・支援員による指導⑤ウエルビーイングの観点から見た児童生徒の長期欠席問題などについて受講生と意見交換をすることになる。

○

昨今は自然災害が日常的に起きるなどウエルビーイングの観点からすれば、大変な時代である。

私自身、一九九五年一月十七日の阪神淡路大震災時、実家は全壊し、我が家も被災した。幸い両親は無事であったが、インフラが崩壊し、絶望的な状況のなか、淡路島通ふ千鳥の鳴く声にいく夜寝覚めぬ須磨の関

守」『百人一首』源兼昌の一首が浮かび、唱えることで何かしら勇気づけられたことを思い起こす。

また本年四月、須磨寺に参ったとき、美しい三重の塔と境内の桜を目にした。その際、次の二首が浮かんだ。「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」「散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき」『伊勢物語』82段渚の院

今から千年以上前の平安時代から日本人にとっては「桜」を愛でる感覚とその背後にある情景までも読み解く素質があったことに、現代を生きる私たちにとって非常にシンパシーを感じるとともに、日本人としての誇りと有り難さを感じる。

本稿の主題でもあるウエルビーイング時代における学校教育の方向性を考える上で、日本の古典のすばらしさ、七世紀から八世紀後半に編纂された『万葉集』の時代から江戸時代に続く、先人達の日常における高い精神性、自然環境、生活環境、人間関係などにおける自身との対話を通じての歌や日記、物語などは人間としての感情が強く動かされ、心の琴線に響く。そうした心に刺さる教育も、科学的知識・技術の習得とともに、今後、必要とされる学校教育の方向性であると考ええる。

— 特別講演 —

生成AIは教育に

どのような影響をもたらすのか

阪南大学大学院企業情報研究科長・教授

松田 健

私は仕事柄、多くの方からいずれAIが人間を超えるでしょうか、と尋ねられますが、それは絶対にありません。

たとえば植物は光エネルギーを使って光合成を行い、我々はそれを利用していますが、まだ人間は真似もできない。そういう問題は他にもいっぱいあって我々は自然についてほとんど知らないと言つてよい。それに対してAIが答えてくれる訳がないのです。

また人間が探すこともできない課題は多い。本庶先生が免疫チェックポイント阻害因子の発見とがん治療への応用でノーベル生理学医学賞を



授章された。先生はがん細胞を

攻撃するキラーT細胞に対してもう終わりましたよという指令を与えるタンパク

質をがん細胞が出すということを見され、それを阻害する薬が作られるようになった。ところがすべての患者に有効なのではなく、がん初期の人、再発した人と効き方が違う。それがよく分かっているのだが、

AIでも解決方法は出せていない。

AIがすごいのは、これまでの人類の活動のデータをものすごく高速に、的確にデータを引き出し、人間に分かりやすく文章にまとめてくれる。しかし、これはAIがすごいのではなく、人間の活動がすごいのです。そう考えることが大切です。

最近、東大理IIIの問題をAIが解いて合格したというニュースがあったが、答えのある問題は出来る。それは大したことではないのである。

数学で図形の問題などは図の中にすでに解答がある。問題と答えがセットのものは簡単だが、解答との繋がりが多数存在しているものがある。それが専門家だと見えるのだが、それでも見えない繋がりがあつた。それ

もAIでは見つけ出せない。

AIは「自己教師あり学習」をしている。一つの文章を読み込むと、次に文法的に意味のある単語を予想して出してくる。たくさん文章を読み込むほどAIは整理された文章を出すことができるようになる。これが生成AIの特徴である。

今日、児童・生徒・学生が教師から与えられた宿題や課題に生成AIを使用することは当然である。教師はその理解の上で、彼等の学習をどう価値あるものとするかを考えるべきである。

生成AIの利便性は、人が課題を明確にもてば、資料の収集から分析まで短時間でやってくれる。したがってあらゆる場面で使われていることを前提に教育現場で考えていかなければならない。

それには現場におけるコミュニケーションの中で、「それが正しいかどうかを判断する能力」が重要だと考える。

私が学生の指導を求めている中で、学生は助言を求めために適時報告をしていく。ところがその報告が非常に見栄えも質もよいことがある。

この場合、数学・物理や数理統計学に不慣れた研究者や教育者の場合、その素晴らしいさに圧倒されて、本質的な問題点を見逃す可能性がある。

ここで大切なのは、教員と学生とのコミュニケーションである。そこで違和感を感じることが出来る。

しかし、生成AIの出現によって、特定のスキルレベルに到達することが難しかった学習者も、専門家とコミュニケーションをとれるだけのスキルを身に付けることができるよう

になったことは良いことである。

それは教員側が適切に指導が出来なかったのが、生成AIによって解消されたからであらう。

情報の真偽を判断できる能力が益々重要になっているが、それには「考える」姿勢が大切である。積極的に学ぼうとしない児童・生徒や学生に宿題を与えると、「終わらせればよいもの」にしかならず、生成AIに何も考えずに頼ることとなる。そうならないためには「考える」必然性を与える教育コンテンツを開発することが教育者には求められる。

生成AIに相談をする行為は、ハイスコアAIと呼ばれる事象の入り口であることになる。生成AIが普及するまでは問題視されてこなかった点も今日の複雑な社会では顕在化しており、数学や物理学、化学などの自然科学を楽しく学ぶ子供達を育てるためにも、教育の在り方を再検討する必要がある。

必要なものを最小限に教え、大理解できればよいということではなく、難解な内容であっても、入り口を変えることで面白さや興味を喚起できるようにすることを広めていきたいと考えている。

※以上の基調講演と特別講演の概要は、研究紀要を要約したものです。表現等、文章についての責任は編集部にあります。

実践発表

〈キャリア教育・職業教育〉

キャリア教育の現状と課題

阪南大学講師 中塚 正裕



今年の日本財団による「18歳意識調査」によると、日本の若者は「将来の夢を持っている」と答えた割合が欧米やアジア諸国と比較して低い傾向があった。また「自分の行動で国や社会を変えられると思う」も低く、「なりた職業がない」は逆に他国が数%なのに日本は23%と高い。

これは若者の問題というより、日本の教育や社会環境に問題があると考えられる。以前から日本の子供たちには自己肯定感が低い傾向が見られたが、家庭や学校で自己否定に陥る接し方があったのではないだろうか。また子供たちは大人が働く場を見たりする体験がなく、将来像を描きにくいのではないか。

近年はキャリア教育の充実が求められている。しかし、教員養成の大学でも教員免許の取得や教員採用試験の合格が目標となっていて、自身の教員としての適性や教育観を見つめることの少ない学生もいる。

そこで本学の教職科目「職業指導」において、学生自身が自己理解を深

め、主体的にキャリア形成を考えるようにしている。

授業はキャリア教育の理論や指導の方法だけでなく、学生自身がこれまでの進路選択を振り返り、職業観や将来設計を考え、さらに教壇に立つた時、生徒にキャリア形成を支援する実践力を養うことを目指した。

まず、自分自身が中高生で受けてきた進路指導を振り返り、進路選択の経緯を確認した。

次にキャリア教育の基本的な考え方や理論を説明し、今日のキャリア教育は生涯を見据えた生き方や働き方を主体的に考え、自己実現を目指す教育であることを押さえた。

また自己理解を深めるために、学生自身の職業観を把握し、将来のキャリアプランや、働くことへの期待や不安についても考えさせた。

この実践により、将来教員となる学生にとって、生徒の立場からキャリア教育を見直すことで、どのように助言したらよいかという教師としての視点が身についたと考えている。教職課程を履修する学生の多くは、将来、学校現場でキャリア教育を担う。その時、この授業で得たキャリア教育を指導する知識や技能だけでなく、自ら自己理解を深め進路選択を主体的に考えた経験が生きていくと期待している。

〈小学校〉

ジャパニーズスピリッツ教育の

実践と展望

広島市立小学校教諭

片川 儀治



今日の変化の激しい時代を生きる子供達には、社会の一員としての役割を自覚し、志をもつて主体的に生きる力を育成することが重要である。

そのためには、日本の歴史や伝統文化を学び、公共心や責任感、利他の精神などを身に付けることが大切であるが、現代の複雑で多様な課題を解決するには探求学習を通じた非認知能力の育成など現代教育の長所を生かす新しい教育が必要である。

そのための教育理論としての「ジャパニーズスピリッツ教育」を提唱している。

その実践の一つとして偉人教育をあげられた。まず歴史の転換点で活躍した人物を紹介し、その人物の功績を理解させたが、それだけでなく、なぜその行動を選択したかを考えさせ、自分の生き方に結びつけるようにした。

また、郷土教育を行い、地域の歴史や文化財、産業について調査する

活動を行った。

子供達には地域を実際に調査することで、地域の良さと課題を見つけさせた。さらに自分たちはその課題に対して何ができるかを考えさせ、成果を他者に発信するまで取り組ませた。単に地域を理解するだけでなく、自分たちが地域を良くする主体であることを自覚させ、地域への参画意識の育成を図ったのである。

日本国憲法や主権者教育に関する学習では、歴史的経緯を理解した上で、現代社会の課題について討論する活動を取り入れた。子供たちは日本国憲法の特徴を理解するだけでなく、現実の国際情勢の中で日本を維持発展させるためにはどんな憲法がふさわしいかと、意見交換をする場を設けた。

いずれの実践も知識を得るだけでなく、自分なら日本をどう良くするか、という視点を持ったのである。

その結果、子供達は「日本の和の心を外国の人に伝えたい」「日本を誇りに思う」「今の平和な日常は先人の努力のおかげであることが分かった」という日本に対する誇りや自信をもつことができた。

今後は国内だけでなく、台湾を始めとして諸外国とも交流し、日本精神を現代教育に変換し、教育課題への挑戦をしていきたい。